

## 関数の極限について (5月15日)

**Definition 1**  $x = a$  の近くで定義された関数  $y = f(x)$  を考える。  $f(x)$  は  $x = a$  では定義されていなくてもよい。

$$\lim_{x \rightarrow a} f(x) = A$$

とは  $\varepsilon$ - $\delta$  論法を用いて定式化する (Cauchy, Weierstrass による) と

「任意の正数  $\varepsilon$  に対して、ある正数  $\delta$  が存在して  $0 < |x - a| \leq \delta$  をみたすすべての  $x$  について  $|f(x) - A| \leq \varepsilon$  となる。」

(注)

(1)  $\delta$  は  $\varepsilon$  に応じて変わるし、いろいろな取り方がある。  $\varepsilon$  が小さくなればなるほど  $\delta$  を小さくしなければならないだろう。

(2)  $a$  が  $f(x)$  の定義域に入っていて  $f(a) \neq A$  でも構わないことに注意してほしい。

問 1. 次に従い  $\lim_{x \rightarrow 1} x^2 = 1$  を示せ。

(1)  $|x - 1| \leq 1$  のとき  $|x^2 - 1| \leq 3|x - 1|$  となることを示せ。

(2)  $\varepsilon > 0$  がまず与えられたとする。

$$|x - 1| \leq \delta \text{ ならば } |x^2 - 1| \leq \varepsilon$$

が成立するような  $\delta$  を  $\varepsilon$  を用いて求めよ。

(注) (1)  $\delta$  はいろいろな取り方がある。

(2)  $x$  が  $a$  に右側から (大きい方から) 近付くとき  $f(x)$  がある数  $A$  に収束するときがある。これを

$$\lim_{x \rightarrow a+0} f(x) = A$$

と書き、  $f(x)$  の  $x = a$  での右側極限值 (または、右からの極限值) という。

正確にいうと、

「任意の正数  $\varepsilon$  に対して、ある正数  $\delta$  が存在して  $a < x < a + \delta$  をみたす  $x$  について  $|f(x) - A| \leq \varepsilon$  となる。」右・左を逆にして、左側極限值が定義できる。これを

$$\lim_{x \rightarrow a-0} f(x) = B$$

と書き、  $f(x)$  の  $x = a$  での左側極限值 (または、左からの極限值) という。

**Definition 2** 関数  $y = f(x)$  が  $x = a$  で連続とは  $\lim_{x \rightarrow a} f(x) = f(a)$  のときにいう。すなわち「任意の正数  $\varepsilon$  に対して、ある正数  $\delta$  が存在して  $0 < |x - a| \leq \delta$  をみたすすべての  $x$  について  $|f(x) - f(a)| \leq \varepsilon$  となる。」

(注) (1) 上の定義で、  $0 < |x - a| \leq \delta$  を  $|x - a| \leq \delta$  にしても同じである。  $y = f(x)$  の定義域の各点で  $f(x)$  が連続のとき、  $y = f(x)$  は連続であるという。

(2) 関数  $f(x)$  が  $x = a$  で連続でないということは命題の否定を考えることにより、

「ある正数  $\varepsilon$  が存在して、どのように正数  $\delta$  をとっても  $|x-a| \leq \delta$  をみたす  $x$  で  $|f(x) - f(a)| > \varepsilon$  となるものが存在する。」

### § $\varepsilon$ - $\delta$ 論法, $\varepsilon$ - $N$ 論法が必要になる理由

これまで極限の厳密な定義を学んできたが、なぜ「限りなく近づく流」の定義では不十分なのか説明したい。(しかし、興味深いことにすでに微積分法の発見者ニュートンやライプニッツもすでに  $\varepsilon$ - $N$  論法,  $\varepsilon$ - $\delta$  論法に近い考え方を持っていたらしい。)

(1) 至るところ微分不可能な連続関数の存在

$$f_n(x) = \sum_{k=1}^n a^k \cos(b^k x) \quad (x \in \mathbb{R}).$$

ただし  $0 < a < 1$ ,  $ab > 1 + \frac{3}{2}\pi$  とおく。このとき、 $f_n(x)$  は  $n$  を限りなく大きくするとある連続な関数  $g(x)$  に近付いていくことがわかる。驚くべき事にこの関数  $g(x)$  は連続だが、どの  $x$  でも微分不可能である。 $g(x)$  が  $x = a$  で微分可能とは極限

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{g(a+h) - g(a)}{h}$$

が存在することである。もちろん、 $f_n(x)$  は  $\cos$  の三角関数を足し合わせているだけだから、何回でも微分できる関数だが、その収束した関数はそうでは無いというのである。このような微妙なことをチェックするには限り無く流では到底無理である。

(2) 次のような問題を考えよう：

「 $\{f_n(x)\}_{n=1}^{\infty}$  を  $[0, 1]$  の上で定義された関数の列とする。各  $f_n(x)$  は  $[0, 1]$  で連続とする。今、各  $x \in [0, 1]$  について極限  $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x)$  が存在するとする。その極限は各  $x$  に依存するので、 $f(x)$  と書くことにする。では、関数  $f(x)$  は  $[0, 1]$  上の連続関数になるだろうか？」

答えは「Yes のときもあるし NO のときもある」である。 $\varepsilon$ - $N$  論法など極限の概念の厳密な定義に貢献した Cauchy(1821) ですら、上の問は Yes と思っていたらしく、Abel の反例(1826) に関して頭を悩ませていたという。簡単な例として  $f_n(x) = x^n$  と  $f_n(x) = \frac{1}{n+x}$  を考えてみるとよい。

$f(x)$  が  $x = a$  で連続とは

$$\lim_{x \rightarrow a} f(x) = f(a)$$

ということだから、 $f_n(x)$  が連続関数であることに注意すると

$$\lim_{x \rightarrow a} \lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} \lim_{x \rightarrow a} f_n(x)$$

という“二つの極限”の順序交換ができるということと同じである。しかし、一般的にはこのようなことはできないのである。このような「極限の順序交換」は実際上の計算でも理論上でもいろいろな場面(たとえば「微分方程式の解の存在証明」など)で出て来るものである。この交換がいつできるかを論じるためには、極限や連続性の定義において「限りなく流」では不十分で、「 $\varepsilon$ - $\delta$  論法」などのきちんとした定義が必要になるのである。(2)の問題はその後、Weierstrass による関数の一様収束という概念(1841)を生み出すことになる。実は(1)であげた  $f_n(x)$  は  $g(x)$  に一様収束している。(解析学 A, B ではこの問題は扱わない。)

## § 初等関数

多項式、あるいはその分数の形で書かれる関数、三角関数、指数関数、対数関数などの関数を初等関数と言う。

これらは、連続関数の代表的な例だが、これらの関数の連続性はどのようにチェックするのだろうか？

(1) 多項式、それらの分数の関数：

これらが連続であることは、4月10日のプリントの Theorem 4 からわかる。

(2) 三角関数：

$\lim_{x \rightarrow 0} \sin x = 0$  は  $\sin x$  の定義から  $x$  が十分小さい時、 $|\sin x| \leq |x|$  ということからわかる。

$\sin^2 x + \cos^2 x = 1$  だから  $\lim_{x \rightarrow 0} \cos x = 1$  がわかる。一般の  $x$  での  $\sin x, \cos x$  の連続性は加法定理を用いて示される。 $\tan x$  ( $x \neq \frac{n\pi}{2}$ ) の連続性は  $\sin x, \cos x$  の連続性、Theorem 4(4/10) による。

(3) 指数関数：

指数関数の定義は実数の連続性を用いて定義される。その定義に基づき、指数関数 ( $f(x) = a^x$   $a > 0, x \in \mathbb{R}$ ) の連続性が示される。どのように定義するかは講義で述べる。ところで、 $0^0$  は0でしょうか?それとも1でしょうか?

(4) 対数関数

対数関数は指数関数の逆関数として定義される。ここで次の定理に注意する。

**Theorem 3**  $y = f(x)$  ( $a \leq x \leq b$ ) を単調増加 (すなわち、 $x < x'$  ならば  $f(x) < f(x')$ ) または単調減少 ( $x < x'$  ならば  $f(x) > f(x')$ ) な連続関数とする。このとき、逆関数  $x = g(y)$  は  $y$  の連続関数である。

この結果と指数関数が連続関数であることから、対数関数  $y = \log_a x$  ( $a > 0, x > 0$ ) が  $x$  の連続関数であることがわかる。

さらに、

**Theorem 4**  $y = f(x)$  ( $a \leq x \leq b$ ),  $z = g(y)$  ( $\alpha \leq z \leq \beta$ ) は  $x, y$  の連続関数とする。さらに  $f([a, b]) \subset [\alpha, \beta]$  とする。このとき、合成関数  $h(x) = g(f(x))$  ( $a \leq x \leq b$ ) はやはり  $x$  の連続関数になる。

なども使えば、上の初等関数の和、差、積、商、逆関数をとる操作、関数の合成を取る操作でたくさんの連続関数を作ることができる。

(注) 三角関数、例えば、 $f(x) = \sin x$  ( $-\frac{\pi}{2} \leq x \leq \frac{\pi}{2}$ ) は単調増加関数だから連続な逆関数が定義される。この関数は  $y = \arcsin x$  ( $-1 \leq x \leq 1$ ) と書かれる関数である。これも大事な関数だが、高校までは出て来なかった関数である。この関数は微分法の解説のところで取り上げる。